



きっずコスプレトレイン 妖精列車が走りました

下仁田からはバスでねぎぼうず館まで、食事したり氷を食べたり、ミニ電気列車に乗ったり、猫の版画に触れたり、楽しい一日を過ごしました。子供たちは「また妖精になりたい」と口をそろえて言っていました。またね。



画 大野隆司

見逃さないで後をつけてみましょうか。妖精の国のフィンランドでのお話です。

もし、森で小さな10センチほどの小さな人間らしきものを見たら……

実は花を咲かせ、樹木を緑にするのも、鳥や動物や昆虫までも働かせる力を持っているのも妖精のちからだそうです。人が神か、はたまた精霊か。森で嘘をつく妖精にみぬかれて、しっぺ返しに会うとか、怖いですね。

妖精は森に棲んでいるといわれています。妖精の寿命は実に300年から500年ともいわれています。森の大きな木のどこかの入り口から妖精の住む家にたどり着く、というのですが、そこまでの道は長い長い道のりだそうです。妖精がどんな姿をしているか知りませんが、森から出てくるときは人間の形をし、超人的な力を発揮するとか。

妖精って本当にいるの？

妖精は森に棲んでいるといわれています。妖精の寿命は実に300年から500年ともいわれています。

森の大きな木のどこかの入り口から妖精の住む家にたどり着く、というのですが、そこまでの道は長い長い道のりだそうです。

妖精がどんな姿をしているか知りませんが、森から出てくるときは人間の形をし、超人的な力を発揮するとか。

実は花を咲かせ、樹木を緑にするのも、鳥や動物や昆虫までも働かせる力を持っているのも妖精のちからだそうです。人が神か、はたまた精霊か。森で嘘をつく妖精にみぬかれて、しっぺ返しに会うとか、怖いですね。

もし、森で小さな10センチほどの小さな人間らしきものを見たら……

画 大野隆司



画 田島葉子

ねぎぼうず
vol. 11
2024 Autumn

NEGI BOZU PROJECT
女性村

EVENT

秋のイベントのご案内

着物・羽織リメイク教室
上原孝子
日時：令和6年10月5日(土) 13:00~15:00
費用：3,000円 ※事前のお申込み不要

手相鑑定
浅野美由紀
日時：令和6年10月5日(土) 10:00~15:00
費用：1,000円/10分
(複数人での利用については加算の可能性あります)
※事前のお申込みが必要

講演会 黛和男・黛一子
「秋の里山」黛和男「バリ島の思い出」黛一子
日時：令和6年10月12日(土) 10:00~12:00
費用：無料 ※事前のお申込み不要

「尼僧による青空説法」
高橋美清
日時：令和6年10月12日(土) 13:00~14:00
費用：無料 ※事前のお申込み不要

フジの部屋「コンサート」
高橋操・高橋美清
出演：ピアノ演奏 高橋操・唄 高橋美清
日時：令和6年10月12日(土) 14:00~
費用：無料 ※事前のお申込み不要

「尼僧の人生相談」
高橋美清
日時：令和6年10月13日(日) 11:00~
費用：20,000円/1時間 ※事前のお申込みが必要

遊びと学びの自然教室
里見哲夫
出演：桜田稔氏「幸せの青い蜂について」
日時：令和6年10月19日(土) 13:00~
費用：無料 ※事前のお申込み不要
(くまみ鉱山研究会ご協力)

生き生き健康講座
相川厚
テーマ：『温泉の効用』健康相談も承ります
日時：令和6年10月19日(土) 11:00~12:00
費用：無料 ※事前のお申込み不要

ヴァイオリンとピアノのコンサート
平澤仁・後藤泉
出演：ヴァイオリン 平澤仁・ピアノ 後藤泉
日時：令和6年11月4日(月曜日・振替休日)
13:30~14:30
費用：3,000円 ※事前のお申込みが必要



画 田島葉子

クリスマスコンサートのお知らせ

みんなで楽しもうクリスマス
全員が2児のママさんというレインボーカルテット。各地で活躍中ですが、7月には高崎文化会館でご覧になった方もいらっしゃるでしょう。今年のクリスマスコンサートの下仁田ねぎぼうず館、フジコ・ヘミングの部屋で行います。ピンゴ大会と小さなプレゼントも用意しています。少し足を延ばして、ぜひお越しください。
日時：令和6年12月22日(日) 13:00~
出演：ピアノ 岸本あかね
ヴァイオリン 北村あや
フルート 杉田美紀
司会と歌 雨宮知子
費用：3,000円 ※事前のお申込みが必要



NEW

●富岡を愛する会の応援を得て
売店での絹リメイク製品販売
●2F 富岡製紙場押し花絵画展示
常設の売店、絵画展示、コーヒーの販売など
さまざまにアイデアをもって
皆様をお待ちしています。

※各イベントにつきましては、諸事情により日程の変更や中止となる可能性があります。
ご参加の際は、事前に当協会ホームページまたはお電話にて最新情報をご確認頂けますようお願い致します。

NPO法人 日本子守唄協会事務局

TEL:03-6458-0283 FAX:03-6458-0284 E-mail:info@komoriuta.jp

https://www.komoriuta.jp/

お申込み
お問合せ先

里見先生の言伝

日本子守唄協会理事長
西館 好子



猛暑の中、背を丸めた大柄の里見先生は確かな足取りで、町の巡回バスを降りると旧西牧小学校の廃校後に作られた「ねぎぼうず館」にやってきました。そのまま、校庭を歩き、草の生い茂った隅に目を止め、生えている草花を探ると、またゆっくり歩きだしました。今日の自然採集の日課はもう一年ほど続いているでしょうか。

老いても、その好奇心と行動力はなにも変わっていないようです。私は教室の窓から、そんな先生の姿を何度も拝見しました。

「こんな草がありましたよ」と毎度見せに来るのが楽しみでした。

里見先生が『町の宝』と言われるゆえんは、四代も教育長を務めあげ、植物研究者としても、牧野富太郎博士と匹敵する実績をお持ちなだけでなく、今でも多くの方が先生の徳を慕い、会いにいらつしやることもよくわかります。「自然のすこさ、楽しさを伝え教えたい」という思いがねぎぼうず館の一室に出来上がりました。自ら、標本や造形、木っ端の一つ一つが生き物のように並んだ部屋は自然が日常に私たちと一緒に息づいている感じがします。教子たちが次々やっつけいらつしやいます。

老いた先生は博学だけでなく気骨のある方です。「上州は特に下仁田は日本一のブランド葱を持っている。これは必死になっ

て作り、広げるに値する名品です。子供は少ない、若者は町から出てしまふ、老いは眠っているじゃダメなんだよ」歯がゆい思いが伝わります。

下仁田葱の取材にお伺いした日の明快なお話が今も心に焼き付いています。「葱の伝来は資料がないのでわかりませんが、下仁田葱と命名したのは、植物学の父と言われた牧野富太郎氏、学名はAllium tsuloson L. giganteum nakino 下仁田葱、または一本葱と称されています。

この葱が実に牧野先生とのご縁につながりました。もともと私は理科の教師で植物に関心が深かったのです。あれは昭和30年でしたか、地元の植物を採集してわからない種を見つけ、先生にお手紙したのが始まりです。まあ丁寧なお返事にびっくりしました。恐縮しました。研究にすべてをかけていらつしやるこれは誰もかなわないと痛感しました。

牧野先生はすでに高齢で老いを振り絞って書かれたであろうと、それからお手紙のやり取りさせていただくことになりました。ある時、下仁田葱を送ってほしいと依頼がありました。10月の事でちょうど植え替え、冬まで待つてくださいとお返事しました。12月にお送りしました。文献を見ると、下仁田葱は既に江戸時代にはブランド中のブランドになっていたもので将軍への献上から『殿様葱』と呼ばれていたようです。その後、改良を続け、量産できるようになり、町を挙げて『下仁田葱』の生産に乗り出したころは冬は葱で凍っていたくらい、町の活気も景気も最盛でした。

そのままといい訳には行かず、今では高齢化し、採算が合わない、後継者はいない、農業国なのに農業はすでに一次産業として体をなしていないということで農家も減ってきています。時代の流れとして仕方ないことなのでしょうが、この自然に恵まれた土地に何とか伝えたいという思いが先生にはおありなのです。国家愛は郷土愛から始まる。私はこの思いを日ごろの先生からいつも感じています。

最近のねぎぼうず館



上信電鉄楽団の演奏



ねぎぼうず館にお出でになった福岡県大木町平松町長と松原健之さん、下仁田館にて



上原孝子さんの部屋は間もなくオープンです



ねぎぼうず館のねぎは順調に育っています



フジコさんの部屋で松原さんが即興で演奏しました



相変わらず美清さんの説教は満員です

兄のジェット機

ガーデンデザイナー 多田 欣也



画 多田 欣也

昭和30年代、子供向けの月刊誌が多く発行されていました。「少年」「少年画報」「ぼくら」などです、毎号豪華な付録がいつぱいついていて、本よりもその付録目当てで買ってもらっていました。その付録は幻灯機、映写機、ステレオなど紙製で組み立てるのはとても難しく兄たちを手伝ってもらわなくてはできないものばかりでした、泣きながら何とか完成させた映写機なども、押し入れで二三日見れば飽きてほったらかしになるのがいつものこと、わかっているのに次の付録の広告に早くも心を踊らされ、来月が待ち遠しいのでありました。

少年サンデーやマガジンの漫画週刊誌は、兄たちが買ってもらうので、読ませてもらっていました。月刊誌は家では「少年」と決まっています。「鉄腕アトム」「鉄人28号」を内容も解らないのに、「早く読んで回せじゃ」とケンカしながら読みました。おばあさんは新聞広告の裏に印刷のない紙を取っておいてくれます、それに鉛筆で漫画を真似して描きました。おそ松くんやチビ太、イヤミを一生懸命書き、学校に行くと皆に描いて見せると「すごいすごい」と褒められます、それがうれしくて毎日書いていました。

「漫画ばかり描いてないで宿題しろ」と怒られますが、漫画を描いているのは私

だけで兄二人は雑誌に特集されるゼロ戦や隼、戦艦大和などの挿絵やプラモデルの箱絵を真似して精密に描いていました、特に6歳違う長兄の描くジェット戦闘機F86はすごかったです、黒の鉛筆と赤と青が一本になった色鉛筆で、まるで本物の設計図のように細かくリベットの点々やパイロットまでちゃんと描くのです。「すげーなあー」と言いながらそばにいてもっと描いてとせがむ私に、優しい兄は怒らずに何度も描いてくれました、今その絵は一枚も残っていませんが、頭の中にずうっとこびりついています、60年以上もたちますが今もその絵を超える絵を私は描くことができません。

松永伍一先生の部屋と替女唄 そして松永先生をしのんで松原健之の唄

7月28日、容赦なく照り付ける灼熱の太陽。部屋の隅々まで光がとおる、猛暑の教室に多くの方が集まりました。替女唄は盲目の旅芸人の語りです。

イメージは寒い冬の真っ白な雪の中を歩く替女たちの姿ですが、夏の日の今日はからりと明るい労働のたくましい一面が浮き彫りにされたようです。

門付け芸人として替女としてしか生きていけないと教えられ、三味と喉を頼りの生涯を送った女性たちです。その世界はすでに遠い昔の歴史の中にしか残っていません。

詩人の松永伍一さんは替女を女性の哀史と、替女唄を哀歌として位置付けていました。

この日は横川恵子さんが三味線を片手にわざわざ新潟から替女唄をうたいに来てくださいました。替女唄伝統継承者として第一人者の女性です。

門付けの挨拶から「葛葉子別れの」のさわり、都会の喧騒のなかでは聞けません。音符から学んだものではなく、独特な節まわりと語りが特徴です。

幼い時に親方と呼ぶ替女に弟子入りし、つらい修行を経て旅に出ます。今だったら幼児虐待と言

われるかもしれませんが。しかし、それは生活の生業であり、来訪を待ちわびていた客はいたのです。

この日、横川さんは「替女唄」の代表と言われる「葛葉子別れ」のさわりや、村に入るときの挨拶の唄など披露していただきました。

当日は特別に、歌手の松原健之さんがギター弾き語りで、松永伍一さんを偲び、子守唄などの歌を披露してくださいました。



「三味線と替女唄」横川恵子

「松永伍一を偲んで 歌とお話」松原健之

